1

幸志郎は絶望していた。

　あの日、天上院光に自分の秘密がばれ、ペットと言う烙印を押されたあの日から、光の『教育』が始まったのだ。

　それは常人には到底行わないだろう行為だった。

「くそっ……」

　いつもの様に仕事を終えた幸志郎は、シャワーを浴びようと服を脱いで浴室で舌打ちした。

　股間に生えた男の象徴。

　本来なら自家発電するのだが、今の幸志郎には許されない。

　カチャカチャ。

　身体が揺れる度にカチャカチャと金属の音が響く。

「くっ……外れない……か」

　頑丈な金属の物体ーー貞操帯が幸志郎のペニスをギチギチと締め上げていたのだ。

　銀色の冷たい貞操帯には頑丈な金属製の鍵がかけられていた。

　これをつけられた時の光の言葉が今でも幸志郎の脳裏にフラッシュバックする。

「ふふ、コウみたいな性欲の塊はこうして飼い主がきちんと管理しないといけないわよねぇ？ これから、コウはお射精も私が許さないとできないのよ？ これも『教育』よ？ 夜な夜な変態行為に耽るマゾペットを更生させるための……ね？」

　鍵をチラつかせながら楽しげに笑う光の言葉に、幸志郎は嫌でも自分が彼女のペットに貶められたのだと思い知らされていた。

　そして、この貞操帯のせいで幸志郎は逃げることも出来なくなったのだ。

　むしろ、仕事を失い、光との接点が無くなればこの貞操帯を外す機会も永遠に失われる。

　それは一生、男として生きることを許されない、と言う意味だった。

　なんとか鍵を外そうとしてみるも、結果は散々だった。

「畜生……」

　己の不運を呪っていると、スマホが鳴る。

　その通知画面には、天上院光の文字が踊っていた。

「今日の『報告』がありませんが、残業ですか？」

「……」

　光のペットにされてから義務付けられた報告。

　足を組んで椅子に座る光の写真をスマートフォンの画面に映し、部屋の高い位置に置いて写真に向かって土下座をする。

　写真には胸から下しか写っておらず、ハッキリと見えるのは足の裏だけ。

　そんなものに土下座するなんて、なんて情けないのだろうか。

　だが、これは光の命令だった。

　実行しなければ、この貞操帯の鍵がどうなるかわからない。

　半ば脅迫される形で幸志郎は光の命令に従うしかなかった。

　今日の時間と日にちが分かる様に時計を置き、動画を撮影するボタンを押すと、急いで服を脱いで土下座した。

『天上院光様、本日も教師としての仕事を終えました。下等な変態の分際で人間様の仕事に就く私をどうかお許しくださいませ』

　ゴンっと床に額を叩きつけ、光の足の裏が写るスマホに土下座した。

傍から見れば教え子の足の裏が写し出された画像に土下座する全裸の男と言う異様な光景だったが、これを必ず毎日する様に言われていた。

返信などなく既読がつくだけの報告をーー。

曰く、

「先生はまだ人間としてのプライドが忘れられないみたいだから、こうして毎日自分が私の足の裏以下にいるクズで、私のお慈悲で教師を続けていけることを理解させるためよ」

との事らしい。

こんなもので何か変わるかわからないが、光が満足するならそれでいい。

毎日面倒だし、屈辱的だが、貞操帯のためだ、と我慢した。

今の幸志郎にとって、光の機嫌をとることが重要だった。

そうしなければ、射精することができなくなってしまう。

だが、幸志郎は気づいていなかった。

幸志郎にとって仕事後の時間は全て自由の時間であり、ゲームやテレビ鑑賞等の時間に当てていた。

しかし、今の優先度はこの動画撮影だった。

それは光の命令が私生活の中で重要度の高いものであると設定されていることに……。

仕事が終われば、毎日、光にこの惨めな動画報告しなければならない。

そして、そのためには直帰し、すぐに報告しなければならず、飲み会や遊びにいくこともできないのだ。

それには光の許可がいる。

それらに行く場合も、この動画で光に報告してからしなければならないのだ。

それは、常に光の事を一番に考え、彼女の命令を基準に動かされていく罠であることに。

◆

天上院光は完璧主義だった。

自分に従えない小人を躊躇いなく『処分』する残忍さは、欠陥品の男どころか、ゴミの小人にとって最低限の行為であり、これが出来ない小人など生かす価値もない、と言うところからだ。

そして、彼女にとって、完璧なペットとは何だろう。

それは簡単な事だ。

私を崇拝し、私の為に全てを捧げ、私が死ねと言えば即座に死ねる存在。

人生の全てを私に捧げ、私の老廃物までも私が出したものだから尊いのだと崇められる存在。

そんなペットと言うより奴隷と言うべき存在こそ光の求めるものだった。

だが、そんな存在はこの世に存在しないだろう。

自分の腹を痛めた子供ですら、それはありえない。

そこで光は考えた。

なら育てればいいのだ。

自分を崇拝する絶対的なペットを。

そして、光が見つけたのが幸志郎だった。

あれをペットにしてみよう。

丁度弱みを握れたし。

送られてきた動画を見ながら、光はほくそ笑んだ。

五分ほどの動画だが、見るのは最初の数秒もない。

ペットの報告にわざわざ時間を割くのは無駄だからだ。

返信と余程気が向いた時だけする。

この動画のためにコウが時間を割いている事実が気分がよい。

少しづつ、垂らした毒が幸志郎を犯し、最後はどんなペットに仕上がるのか興味が尽きなかった。

「さて、次はどうしようかしら、ねぇ？ コウ……」

光はニヤニヤとペンを回しながら、次はどうやって幸志郎を嬲るか妄想を膨らませるのだった。